

ケースで学ぶ 日常みる角膜疾患

西田輝夫 著

山口大学眼科学教室前教授の西田輝夫先生と山口大学眼科の教室員の先生方が執筆された『ケースで学ぶ 日常みる角膜疾患』が医学書院より発刊された。西田先生は世界的な業績を挙げた角膜研究者に贈られるカストロビエフォ賞を受賞された日本を代表する角膜研究家であり、フィブロネクチン点眼による再発性角膜上皮びらの治療、サブスタンス P と IGF（インスリン様増殖因子）の部分ペプチドの点眼による遷延性角膜上皮欠損の治療などの研究で Lancet 誌に論文を数本発表されるなど、輝かしい業績を残されてきた。その西田先生がこれまでの長い診療経験において蓄積された多くの症例から、日常みる角膜疾患を抽出しまとめ上げられたのが本書である。

その内容は、角膜疾患および関連事項を大きく「角膜上皮」「感染・免疫」「角膜変性・内皮」「形状異常・外傷」「腫瘍・全身」「角膜移植」「検査」の7つに分け、それぞれの代表的な疾患や討論点などの小項目を全体で80項目掲げ、詳細な解説が述べられている。各項目においてはまず典型的な症例が提示され、いずれの項目の症例も初診時所見から最終的な転帰までが詳細に記述されており、教室員の先生方が精魂込めて症例をまとめられた様子がうかがえる。そして症例の提示に引き続き、各疾患の説明が、疾患の定義、疾患概念、自覚症状、他覚所見、診断・鑑別診断、治療・予後の順に述べられており、本書の最も読み応えのある部分となっている。

本書を読んで感じる西田先生の診療の根底に流れる一貫した方針は、診断においても治療においても、科

学的、論理的に考え判断することのように思われる。西田先生の診察は残念ながら見学させていただいたことはないが、西田先生の書かれたカルテ所見は何度か拝見する機会があった。その達筆な文字で書かれたカルテでは、各症例において存在する問題因子間の相関関係や因果関係を矢印で結び、その中から診断や治療の方針を打ち立てていくという、論理的な記述がなされていたのを記憶している。西田先生のご講演でしばしば拝見するブロック図が、本書でも「糖尿病角膜症の病態」や「角膜実質融解メカニズムにおけるステロイドの位置づけ」などの複雑な病態や事象を解きほぐしてわかりやすく解説するために使用されており、読者の頭の中を整理してくれるものと思う。

日常臨床で巡り合う各症例において、西田先生が本書で示されているような、科学的、論理的に診療するこだわりを常に持って、診療を実践していきたいものだと思う。本書は日常診療での頻度の高い代表的な角膜疾患のほとんどを網羅し、それらに対する診療の最新の考え方を述べると同時に、未解決の問題に対する自教室での研究成果も多数盛り込まれている。研修医の先生方はもちろんのこと、角膜専門医、一般眼科臨床家、研究者の皆様など、多くの方々に推薦したい1冊である。

東京大学大学院教授・眼科学 天野史郎

●B5 頁 320 2010 年

定価 16,800 円（本体 16,000 円＋税 5%）

【ISBN978-4-260-01017-7】医学書院刊